

# 日本語のかき混ぜの着地点について\*

梶 原 英 二

## 0. 序論

かき混ぜの着地点に関してこれまでに様々な分析がなされてきた。例えば、Kuroda (1988) はかき混ぜの着地点を A 位置と分析し、Hoji (1985) や Saito (1985, 1989) は A' 位置と分析している。Webelhuth (1989) はかき混ぜの着地点が A 位置と A' 位置の両方の特性を兼ね備えていて、A/A' 位置であると主張している。Mahajan (1990, 1994) や Nemoto (1993) は節内のかき混ぜの着地点は A 位置か A' 位置のどちらかであり、長距離かき混ぜの着地点は A' 位置であるとしている。かき混ぜの着地点が LF で再分析されるという分析として、Saito (1992) は非演算子/非 A 位置が LF で A 位置か演算子位置になるとし、一方 Kikuchi, Oishi, and Yusa (1994) は、A' 位置が LF で A 位置になるとしている。

本論文は A/A' の区別に基づいて、かき混ぜの着地点を multiple-Spec 構造によって分析することを試みている。議論を明確にするために、目的語が主語を越える節内のかき混ぜを分析している。

## 1. A 位置特性と A' 位置特性

### 1.1. A 位置特性

かき混ぜの着地点が A 位置であることを示す二つの統語的現象がある。一つめはかき混ぜが弱交差 (Weak Crossover: WCO) 効果を示さないことである：

(1) a. ?\*soitu<sub>1</sub>-no hahaoya-ga dare<sub>1</sub>-o aisiteiru no

b. ?/ dare<sub>1</sub>-o [soitu<sub>1</sub>-no hahaoya-ga t<sub>1</sub> aisiteiru] no (Saito 1992:73, Nemoto 1993:21)

(1a) で dare<sub>1</sub>-o が LF で Wh 移動すると、dare<sub>1</sub>-o は同一指標付与された代名詞 soitu<sub>1</sub> と自らの痕跡を A' 束縛するので (2) によって WCO 違反となり非文となる。

(2) WCO Constraint (Lasnik and Stowell 1991:691)

In a configuration where a Pronoun P and a trace T are both A'-bound by a category C, T must c-command P.

(1b) は (1a) から *dare<sub>1</sub>-o* を主語を越えてかき混ぜしている。(1b) は (1a) の LF 構造と同じであるのに文法的である。これはかき混ぜされた *dare<sub>1</sub>-o* が *soitu<sub>1</sub>* と自らの痕跡を A' 束縛していないからである。つまり、(1b) が WCO 効果を示さないことは、かき混ぜの着地点が A' 位置でなく A 位置であることを示している。

二つめはかき混ぜにより新しい束縛関係が成立することである：

(3) a. ?\*Masao-ga otagai<sub>1</sub>-no sensei-ni karera<sub>1</sub>-o syookaisita (koto)

b. *karera<sub>1</sub>-o* [Masao-ga otagai<sub>1</sub>-no sensei-ni t<sub>1</sub> syookaisita] (koto)

(Saito 1992:74-75, Nemoto 1993:23)

(3a) は *otagai<sub>1</sub>* を c 統御する先行詞が存在しないので、束縛条件 (A) に違反して非文法的になる。一方 (3b) はかき混ぜされた *karera<sub>1</sub>-o* が *otagai<sub>1</sub>* を c 統御する先行詞として機能しているので、前者が 後者を A 束縛する。その結果、(3b) は束縛条件 (A) を満たし、文法的であることが説明される。従って、新しい束縛関係が成立することは (3b) のかき混ぜの着地点が A 位置であることを示している。

## 1.2. A' 位置特性

かき混ぜの着地点が A' 位置であることを示す二つの統語的現象がある。一つめはかき混ぜが束縛条件 (C) の違反にならないことである：

(4) *zibunzisin<sub>1</sub>-o* [Hanako<sub>1</sub>-ga t<sub>1</sub> hihansita] (koto) (Saito 1992:76)

もしかき混ぜの着地点が A 位置であるなら、かき混ぜされた *zibunzisin<sub>1</sub>-o* は代名詞 *Hanako<sub>1</sub>* を A 束縛する。これは束縛条件 (C) の違反であり、(4) が誤って非文法的になってしまう。これに対して、もしかき混ぜの着地点が A' 位置であるなら、かき混ぜされた *zibunzisin<sub>1</sub>-o* は LF で再構築され、元 (= t<sub>1</sub>) の位置で束縛条件の適用を受ける。照応形 *zibunzisin<sub>1</sub>* が先行詞 *Hanako<sub>1</sub>* によって A 束縛されるので、(4) は束縛条件 (A) を満たし文法的になる。従って、(4) が文法的であることはかき混ぜの着地点が A' 位置であることを示している。

二つめはかき混ぜにより寄生的空所が認可されることである：

(5) *dono hon<sub>1</sub>-o* [Masao-wa [Hanako-ga e<sub>1</sub> yomu mae-ni] t<sub>1</sub> yonda] no (Saito 1992:71-72)

(5) の空範疇  $e_1$  が *pro* であるなら、(5) は (1a) と同様に WCO 違反となり、非文法的になるはずである。しかし (5) は文法的であるので、(5) の空範疇は寄生的空所であると分析される。寄生的空所は Wh 移動のような A' 移動でのみ許される現象であるので、(5) のかき混ぜは A' 移動となり、その着地点も A' 位置であることになる。

### 1.3. A/A' 位置特性

Weibelhuth (1989:411) は (6) の例文を挙げて、かき混ぜされた NP が A 位置特性と A' 位置特性の両方を示しているので、かき混ぜの着地点が A/A' 位置であると分析している：

(6) ?Peter hat **die Gäste**<sub>1</sub> [ohne  $e_1$  anzuschauen] einander<sub>1</sub> t<sub>1</sub> vorgestellt

Peter has the guests without to-look-at each other introduced

かき混ぜされた直接目的語 *die Gäste*<sub>1</sub> が付加節にある寄生的空所  $e_1$  を認可 (A' 位置特性) し、同時に照応形 *einander*<sub>1</sub> を A 束縛 (A 位置特性) している。

これに対して、Mahajani (1990:57 - 58, 1994:321) は (6) には次のような別の派生の方法があると提案している：

(7) ... [AGRoP [NP **die Gäste**<sub>1</sub>] [AGRoP [CP ...  $e_1$  ...] [AGRoP t'<sub>1</sub> [VP einander<sub>1</sub> t<sub>1</sub> vorgestellt]]]]

かき混ぜされた NP はまず最初に AGRoP の指定部に A 移動し、そこで照応形を A 束縛する。そして次にその NP は AGRoP の指定部から AGRoP に付加 (A' 移動) し、そこで寄生的空所を認可している。

この分析によれば、付加節 CP やかき混ぜされた NP は AGRoP に付加することになるが、付加節が基底生成位置として AGRoP に付加しているとは考えにくい。むしろ、(6) のかき混ぜされた NP や付加節は (8) のように VP に付加していると分析するほうが自然であるように思われる：

(8) ... [VP [NP **die Gäste**<sub>1</sub>] [VP [CP ...  $e_1$  ...] [VP einander<sub>1</sub> t<sub>1</sub> vorgestellt ]]]

Müller and Sternefeld (1994:373 - 374) は独自の VP 構造を仮定し<sup>1</sup>、(6) を次のように分析している：

(9) ... [VP [NP **die Gäste**<sub>1</sub>] [VP [CP ...  $e_1$  ...] [VP t<sub>1</sub> [v' einander<sub>1</sub> vorgestellt]]]]

(9) では VP の指定部にあるかき混ぜされた NP の痕跡が照応形を A 束縛し、束縛条件 (A) を満たしている。そして A' 位置に移動したかき混ぜされた NP が付加節にある寄生的空所を認可している。

問題は、(9) の構造が注 1 で示した二重の VP 構造になっていないことである。このままでは基底生成位置にある間接目的語 *einander*<sub>1</sub> に構造格が付与されず、格フィルターに違反することになる。さらに、二重目的語構文の間接目的語が構造格をもつという彼らの仮定に矛盾することになる。

## 2. multiple-Spec 構造

かき混ぜされた NP が A 位置特性と A' 位置特性の両方を示す (6) のような例文は A/A' の区別を実践してきた理論の枠組みでは問題となる。そこで A/A' の区別を破棄することなくこの問題を解決するために、かき混ぜを Chomsky (1995) で提案された multiple-Spec 構造を用いて分析してみたいと思う。

Chomsky (1995:286) によれば multiple-Spec 構造は (10) のように定義される：

(10) [<sub>XP</sub> Spec<sub>1</sub> [<sub>X'</sub> Spec<sub>2</sub> [<sub>X'</sub> X ...]]]

この構造において A 移動する要素は Spec<sub>1</sub> の位置に移動し<sup>2</sup>、一方 A' 移動する要素は XP に付加すると仮定する。この仮定に基づくと、A 移動は (11a) の構造になり、A' 移動は (11b) の構造になる：

- (11) a. [<sub>XP</sub> (Spec<sub>1</sub> =) YP<sub>1</sub> [<sub>X'</sub> Spec<sub>2</sub> [<sub>X'</sub> X [<sub>ZP</sub> ... t<sub>1</sub> ...]]]] (A 移動)  
 b. [<sub>XP</sub> YP<sub>1</sub> [<sub>XP</sub> Spec<sub>1</sub> [<sub>X'</sub> Spec<sub>2</sub> [<sub>X'</sub> X [<sub>ZP</sub> ... t<sub>1</sub> ...]]]]] (A' 移動)

文構造に関しては、本論文では Chomsky (1995) の枠組みに従い機能範疇 AGR を廃止した次の構造を採用している：

(12) [<sub>TP</sub> SU [<sub>T'</sub> T [<sub>VP</sub> t<sub>SU</sub> [<sub>v'</sub> v [<sub>VP</sub> V OB]]]]]

この構造は他動詞構文であり、v は軽動詞である。

(10) から (12) の最新の極小主義の仮定に基づくと、(6) は (13) の構造になる：

(13) ... [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> *die Gäste*<sub>1</sub>] [<sub>VP</sub> [<sub>CP</sub> ... e<sub>1</sub> ...] [<sub>VP</sub> t'<sub>1</sub> [<sub>v'</sub> t<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> *einander*<sub>1</sub> t<sub>1</sub> *vorgestellt*]]]]]]]

かき混ぜされた NP は最初に vP の外側の指定部 (= Spec<sub>1</sub>) に A 移動し、そして次に

その位置から  $\nu P$  に付加 (A' 移動) している。最初の移動の着地点は  $\nu P$  の外側の指定部 (= A 位置) であるので、ここで照応形が A 束縛され、束縛条件 (A) を満たす。次の移動の着地点は  $\nu P$  に付加した位置 (= A' 位置) であるので、かき混ぜされた NP によって寄生的空所が認可される。その結果、最初の移動で A 位置特性が説明され、次の移動で A' 位置特性が説明されることになる。

この分析に従えば、かき混ぜされた NP が A 位置特性と A' 位置特性を同時にもつという問題が生じない。さらに A/A' の区別を維持できることになる。このことはかき混ぜが multiple-Spec 構造によって適切に説明されることを示している。

### 3. multiple-Spec 構造による日本語のかき混ぜの分析

#### 3.1. 主語を越える節内のかき混ぜ

multiple-Spec 構造を用いると、日本語の主語を越える節内のかき混ぜの構造は次のようになる：

- (14) a.  $[_{TP} XP_1 [_T SU [_{\nu P} t'_1 [_{\nu'} t_{SU} [_{\nu P} \dots t_1 \dots]]]]]$  (A 移動)  
 b.  $[_{TP} XP_1 [_{TP} SU [_{\nu P} t_{SU} [_{\nu P} \dots t_1 \dots]]]]]$  (A' 移動)  
 c.  $[_{TP} XP_1 [_{TP} SU [_{\nu P} t'_1 [_{\nu'} t_{SU} [_{\nu P} \dots t_1 \dots]]]]]$  (A - A' 移動)

主語を越えるかき混ぜが A 移動である場合、(14a) のようにかき混ぜによって移動する XP は  $\nu P$  の外側の指定部を経由し、最終着地点である TP の外側の指定部に移動しなければならない。主語を越えるかき混ぜが A' 移動である場合、(14b) のように TP に付加した位置に移動する<sup>3</sup>。もし A' 移動のかき混ぜでも、(13) のようにその移動の途中で A 位置特性を認可する必要があるなら、XP はまず最初に  $\nu P$  の外側の指定部に A 移動し、それから A' 移動しなければならない。これが (14c) の構造である。

この分析を用いると、1.1 節で見た WCO 効果を示さない文や新しい束縛関係を成立させる文は、それぞれ (15a-b) の構造となり、一方 1.2 節で見た束縛条件 (C) の違反にならない文や寄生的空所を認可する文は、それぞれ (16a-b) の構造となる：

- (15) a.  $[_{TP} dare_1-o [_T soitu_1-no hahaoya-ga [_{\nu P} t'_1 [_{\nu'} t_{SU} [_{\nu P} t_1 aisiteiru]]]]]$  no  
 b.  $[_{TP} karera_1-o [_T Masao-ga [_{\nu P} t'_1 [_{\nu'} t_{SU} [_{\nu P} otagai_1-no sensei-ni t_1 syookaisita]]]]]$  (koto)

- (16) a.  $[_{TP} zibunzisin_1-o [_{TP} Hanako-ga [_{\nu P} t_{SU} [_{\nu P} t_1 hihansita]]]]]$  (koto)  
 b.  $[_{TP} dono hon_1-o [_{TP} Masao-wa [_{CP} Hanako-ga e_1 yomu mae-ni] [_{\nu P} t_{SU} [_{\nu P} t_1 yonda]]]]]$  no

(15a-b) ではかき混ぜされた NP は  $\nu P$  の外側の指定部を経由し、TP の外側の指定部に

A 移動し、一方 (16a-b) では TP に付加 (A' 移動) している。

### 3.2. 問題点

multiple-Spec 構造は A 移動と A' 移動にそれぞれの着地点を設けることが可能になるが、次のような例文が問題となる：

(17) *sono hon<sub>1</sub>-o* [Taroo-ga t<sub>1</sub> katta] (koto) (Saito 1992:69)

この場合、かき混ぜされた目的語 *sono hon<sub>1</sub>-o* の着地点が A 位置であるのか、A' 位置であるのか区別できない。そのため multiple-Spec 構造を用いると、この例文が (18a) のように A 移動する場合と、(18b) のように A' 移動する場合の二種類の構造をもつことになってしまう：

(18) a. [<sub>TP</sub> *sono hon<sub>1</sub>-o* [<sub>T'</sub> Taroo-ga [<sub>VP</sub> t'<sub>1</sub> [<sub>v'</sub> t<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> katta]]]]] (koto)

b. [<sub>TP</sub> *sono hon<sub>1</sub>-o* [<sub>TP</sub> Taroo-ga [<sub>VP</sub> t<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>1</sub> katta]]]]] (koto)

multiple-Spec 構造でかき混ぜを分析する限り、かき混ぜが A 移動であるのか、A' 移動であるのかを常に考える必要が生じる。従って、A 移動のかき混ぜか A' 移動のかき混ぜのどちらかを無標とし、他方を有標とすることが理論的にも妥当であるように思われる。繰り上げや受動化のような NP 移動が格標示/照合のために起こることを考慮すれば、A 移動のかき混ぜも同様に何らかの A 位置特性によって引き起こされると考えられる<sup>4</sup>。しかし、自由な語順を許すかき混ぜの全てが A 位置特性によるとは考えにくい。そこで、本論文ではかき混ぜは基本的には A' 移動であるという立場を取ることにする。

### 3.3. 再構築位置

かき混ぜを multiple-Spec 構造で分析すると、再構築が適用される位置を説明することができる。次の例文を考察してみよう：

(19) a. Joe-ga Micahel<sub>1</sub>-no sensei-ni kare<sub>1</sub>-o syookaisita

b. \**kare<sub>1</sub>-o* [Joe-ga Micahel<sub>1</sub>-no sensei-ni t<sub>1</sub> syookaisita] (Nemoto 1993:99-100)

(19b) は (19a) から直接目的語を主語を越えてかき混ぜしている。かき混ぜが基本的には A' 移動であるという仮定のもとでは、(19b) は次のような構造になる：

(20) [<sub>TP</sub> *kare<sub>1</sub>-o* [<sub>TP</sub> Joe-ga [<sub>VP</sub> t<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> Micahel<sub>1</sub>-no sensei-ni t<sub>1</sub> syookaisita]]]]]

この構造でかき混ぜされた *kare*<sub>1-o</sub> が元 (= *t*<sub>1</sub>) の位置で再構築されると、(19a) と全く同じ構造になるので、(19b) の非文法性を説明することができない。この問題を解決するために、*kare*<sub>1-o</sub> が元の位置で再構築されるのではなく *vP* の外側の指定部で再構築されなければならない：

(21) [<sub>TP</sub> *kare*<sub>1-o</sub> [<sub>TP</sub> Joe-ga [<sub>vP</sub> *t*'<sub>1</sub> [<sub>v'</sub> *t*<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> Micahel<sub>1</sub>-no sensei-ni *t*<sub>1</sub> syookaisita]]]]]

かき混ぜされた *kare*<sub>1-o</sub> は最初に *vP* の外側の指定部に *A* 移動し、それから *TP* に付加 (*A'* 移動) している。再構築は *vP* の外側の指定部 (= *t*'<sub>1</sub>) で適用されるので、*kare*<sub>1-o</sub> が指示表現 *Micahel*<sub>1</sub> を *A* 束縛する。その結果、束縛条件 (C) の違反となるので、(19b) の非文法性が説明される。

(21) の構造は *A-A'* 移動が *A* 位置特性を認可するだけでなく、適切な解釈が得られる再構築を許すために必要であることを示している<sup>5</sup>。

*vP* の外側の指定部で再構築が適用される必要があることは、次の例文によっても支持される：

(22) [*otagai*<sub>1/??2-no hon</sub>]<sub>3-o</sub> [Joe to Kate]<sub>1</sub>-ga [Michael to Janet]<sub>2</sub>-ni *t*<sub>3</sub> watashita

(Nemoto 1993:94)

この例文で、かき混ぜされた直接目的語が元 (= *t*<sub>3</sub>) の位置で再構築されると、照応形 *otagai*<sub>1/??2</sub> は主語 [*Joe to Kate*]<sub>1</sub> でなく間接目的語 [*Michael to Janet*]<sub>2</sub> によって *A* 束縛される。その結果、(22) の解釈 (*otagai* = *Joe to Kate*) ができなくなる。そこで、かき混ぜされた直接目的語は *TP* に付加する前に *vP* の外側の指定部に最初に *A* 移動し、そこで再構築が適用されなければならない：

(23) [<sub>TP</sub> [*otagai*<sub>1/??2-no hon</sub>]<sub>3-o</sub> [<sub>TP</sub> [Joe to Kate]<sub>1</sub>-ga [<sub>vP</sub> *t*'<sub>3</sub> [<sub>v'</sub> *t*<sub>SU</sub> [<sub>VP</sub> [Michael to Janet]<sub>2</sub>-ni *t*<sub>3</sub> watashita]]]]]

この構造でかき混ぜされた直接目的語が *vP* の外側の指定部 (= *t*'<sub>3</sub>) で再構築されると、主語によって *A* 束縛されて正しい解釈が得られる。

最後に次の例文を考察してみよう：

(24) [*zibunzisin*<sub>1/2</sub>]<sub>3-o</sub> [Joe<sub>1</sub>-ga [Michael<sub>2</sub>-ga *t*<sub>3</sub> kiratteiru to] omotteiru] (koto) (Nemoto 1993:25)

この例文では埋め込み節の目的語が主節の主語を越えて長距離かき混ぜされている。こ

ここで注意すべきことは、かき混ぜされた照応形の目的語が主節の主語でも埋め込み節の主語でも、どちらでも解釈できることである。この二通りの解釈は multiple-Spec 構造を用いると自然に導きだすことができる<sup>6</sup>：

- (25) a.  $[_{TP} [zibunzisin_1]_{3-o} [_{TP} Joe_1-ga [_{vP} t'_3 [_{v'} t_{SU} [_{vP} [_{CP} Michael_2-ga t_3 kiratteiru to] omotteiru]]]]]$   
 (koto)
- b.  $[_{TP} [zibunzisin_2]_{3-o} [_{TP} Joe_1-ga [_{vP} t_{SU} [_{vP} [_{CP} Michael_2-ga t_3 kiratteiru to] omotteiru]]]]]$  (koto)

かき混ぜされた NP が (25a) では  $vP$  の外側の指定部を経由して  $TP$  に付加し、一方、(25b) ではそのまま  $TP$  に付加している。前者の場合、 $[zibunzisin_1]_{3-o}$  は  $vP$  の外側の指定部 ( $=t'_3$ ) で再構築されるので、主節の主語  $Joe_1$  によって A 束縛され  $zibunzisin = Joe$  という解釈が得られる。後者の場合、 $[zibunzisin_2]_{3-o}$  が元 ( $=t_3$ ) の位置で再構築されるので、埋め込み節の主語  $Michael_2$  によって A 束縛され、 $zibunzisin = Michael$  という解釈が得られる<sup>7</sup>。

(19b)、(22)、(24) の例文は適正な解釈を得るために  $vP$  の外側の指定部で再構築が適用される場合があることを示している。さらに、かき混ぜを multiple-Spec 構造で分析する一つの証拠となっている。

#### 4. まとめ

本論文ではかき混ぜの着地点に関する問題が multiple-Spec 構造によって解決することを示した。A 移動のかき混ぜは  $XP$  の外側の指定部に移動し、 $A'$  移動のかき混ぜは  $XP$  に付加すると仮定した。さらに  $A'$  移動のかき混ぜの中に、A 位置特性を認可したり、適切な解釈に必要な再構築を行うために、 $A-A'$  移動するかき混ぜが存在することを示した。

#### 注

\* 本論文の草稿を読んで頂き、ご指導・ご助言を頂いた岩倉國浩先生、吉田光演先生、酒井弘先生に心よりお礼を申し上げたい。もちろん、本稿の不備な点はひとえに私の責任である。

<sup>1</sup> VP 構造に関して、Müller and Sternefeld (1994:356) は (i) のような二重の VP 構造を仮定している：

- (i)  $[_{VP1} \alpha [_{v1'} [_{VP2} \beta [_{v2'} \delta [_{v2''} \tau V2]]] V1]]]$

この構造において直接目的語は  $\beta$  の位置に間接目的語は  $\delta$  の位置に基底生成される。ドイツ語の二重目的語構文の間接目的語は構造格であるという立場に基づいて、動詞 V2 が動詞 V1 に繰り上がり、さらに間接目的語が  $\beta$  の位置から  $\alpha$  の位置に移動し、指定部・主要部の一致によって格を付与されると仮定している。D 構造でどんな要素も  $\alpha$  の位置には生成されないので、その位置は A 位置ではないと分析している。

しかし、(i) の二重の VP 構造において、VP1 の指定部が A' 位置であると仮定することには問題があるように思われる。

<sup>2</sup> Chomsky (1995:286) も Spec<sub>1</sub> が A 移動のかき混ぜの脱出口であると考えている。

<sup>3</sup> XP が VP や  $\nu$ P に付加する可能性があるが、本論文ではその必要性がないと考えている。Kajiwara (1994,1995) で提案された障壁理論では VP や  $\nu$ P はそれぞれ  $\nu$  や T によって H 標示されているので、移動の障壁にはならないからである。

<sup>4</sup> A 移動のかき混ぜがどのような A 位置特性によって派生されるのかという問題は今後の研究課題とするが、本論文ではかき混ぜされた語句が [B-] という束縛素性を持っているときにのみ XP の指定部に A 移動できると仮定しておく。[B-] という束縛素性は格素性や一致素性と同様に A 位置素性であり、A 位置で解釈されなければならない。この仮定に従うと、(15a-b) のかき混ぜされた NP は束縛素性 [B-] を持っているので、 $\nu$ P の外側の指定部を通して TP の外側の指定部に A 移動することになる。

<sup>5</sup> 適切な解釈を得るために、A' 位置で再構築される場合がある、との指摘を酒井先生（個人談話）より受けた。

(i) [which picture of himself<sub>1/2</sub>]<sub>3</sub> does John<sub>1</sub> think [t'<sub>3</sub> that Bill<sub>2</sub> likes t<sub>3</sub>]

照応形 himself<sub>1/2</sub> は中間痕跡 (= t'<sub>3</sub>) の位置でも元 (= t<sub>3</sub>) の位置でも再構築の適用を受ける。照応形は前者の場合、John と解釈され、後者の場合、Bill と解釈される。

<sup>6</sup> 議論を簡潔にするために、(25) では埋め込み節内のかき混ぜの移動を省略してある。

<sup>7</sup> Nemoto (1993) は主語を越えるかき混ぜが A 位置である AGRoP の指定部を経由するという分析をしている。この分析で zibunzisin が主節の AGRoP の指定部で再構築されると、zibunzisin は Joe であると解釈されるが、Michael であるとは解釈されない。また、zibunzisin が埋め込み節の AGRoP の指定部で再構築されると、zibunzisin は Michael であると解釈されるが、Joe であるとは解釈されない。従って、Nemoto (1993) の分析では (24) に二通りの解釈が存在することが説明できない。

参考文献

- Chomsky, N. 1995. "Categories and Transformations," *The Minimalist Program*, 219 - 394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hoji, H. 1985. *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Kajiwar, E. 1994. "Two Types of Barriers for Movement," 『欧米文化研究』 1, 43 - 58.
- . 1995. "The DP Analysis and Barriers," 『欧米文化研究』 2, 57 - 68.
- Kikuchi, A., M. Oishi, and N. Yusa. 1994. "Scrambling and Relativized L-Relatedness," *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 141 - 158.
- Kuroda, S.-Y. 1988. "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Lingvisticae Investigationes* XII, 1 - 47.
- Lasnik, H. and T. Stowell. 1991. "Weakest Crossover," *Linguistic Inquiry* 22, 687 - 720.
- Mahajan, A. 1990. *The A/A-Bar Distinction and Movement Theory*. Doctoral dissertation, MIT.
- . 1994. "Toward a Unified Theory of Scrambling," in N. Corver and H. Riemsdijk, eds., *Studies on Scrambling: Movement and Non-Movement Approaches to Free Word-Order Phenomena*, 301 - 330. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Müller, G. and W. Sternefeld. 1994. "Scrambling as A-Bar Movement," in N. Corver and H. Riemsdijk, eds., *Studies on Scrambling: Movement and Non-Movement Approaches to Free Word-Order Phenomena*, 331 - 385. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nemoto, N. 1993. *Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Saito, M. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- . 1989. "Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement," in M. Baltin and A. Kroch, eds., *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182 - 200. Chicago: University of Chicago Press.
- . 1992. "Long Distance Scrambling in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 69 - 118.
- Saito, M. and H. Hoji. 1983. "Weak Crossover and Move  $\alpha$  in Japanese," *Natural Language and Linguistics Theory* 1, 245 - 259.
- Webelhuth, G. 1989. *Syntactic Saturation Phenomena and the Modern Germanic Languages*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.